

第1章 計画の背景と目的

1.1 草津川跡地の意義

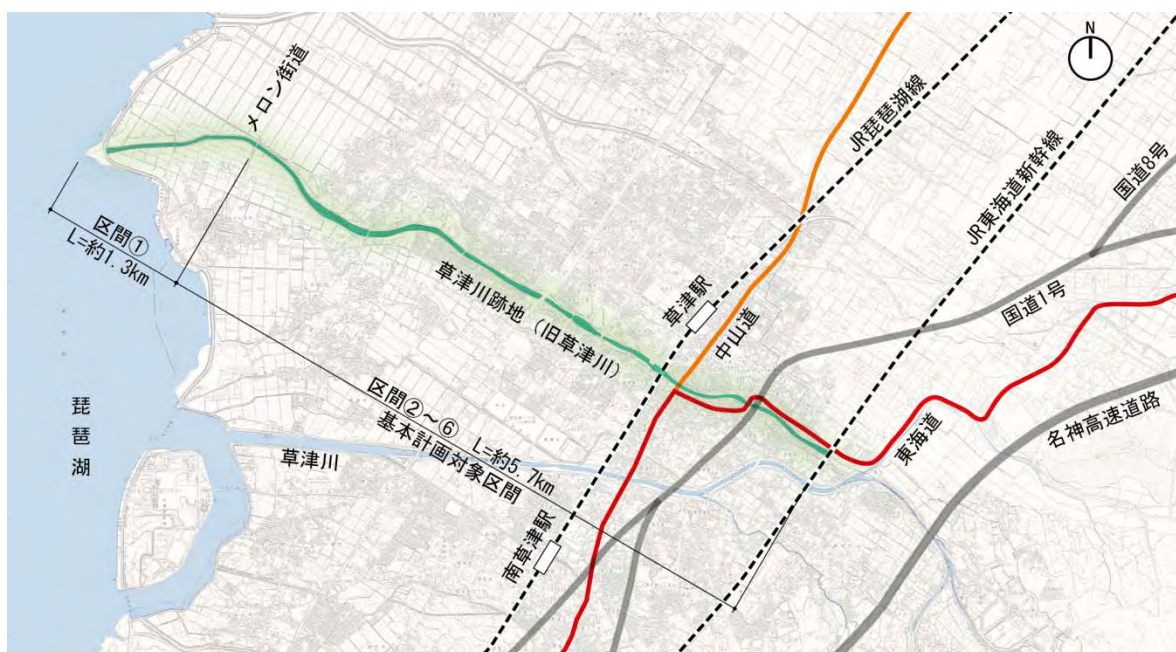
旧草津川は、江戸中期以降、土砂の堆積作用による急激な河床の上昇と治水対策としての築堤との自然と人為的な相乗作用により、まちよりも高い位置に川が流れる全国的にも有名な天井川*として形づくられ、今日にその姿を伝えています。そして、東海道と中山道が分岐・合流するかわら流れ、渡し場が設けられた旧草津川は、草津宿を構成する景観として大きな役割を担っていました。

現在、川としての役割を終えた草津川跡地は、草津市の市街地の中心部、田園部を経て琵琶湖に至り、その規模の大きさは地域環境の骨格ともいえるオープンスペース*となっています。また、市街地のほぼ中央を貫き主要な都市施設をつなぐほか、跡地に沿って広大な未利用地が存在するなど、都市機能を連携・強化する軸としても優れた立地条件を有しています。

草津川跡地の一部は、「草津宿場まつり」や「草津街あかり華あかり夢あかり」など市民参加型のイベント会場として利用されています。また、管理協定のもと地域住民と行政の協働により草津川跡地の暫定的な有効活用と、適正な維持管理が行われるなど、様々なコミュニティ活動が育まれつつあり、広く市民に親しまれています。

このように、草津川跡地は、宿場町や天井川の面影をとどめる歴史・文化的な環境を残しつつ、様々な都市機能をつなぎ、交流や活力を育む、都市のコミュニティ空間としての資質にも非常に恵まれており、他の都市にはない、草津市ならではの優れたまちづくり資源といえます。

なお、琵琶湖～メロン街道までの約1.3kmの区間は、河川区域として滋賀県の管理となるため、本計画の対象範囲はメロン街道～東海道新幹線までの約5.7kmとします。



位置図

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

1.2 計画の視点と目的

本計画は、平成 23 年に策定された「草津川跡地利用基本構想」で示された、“琵琶湖と市街地を結ぶ緑軸* ～特色ある新しい景観の創造と地域における歴史の継承～”の実現化を図るために、草津川跡地のより具体的な整備内容を検討し、整備事業の着手に向けた基本計画を定めるものです。

計画の策定に当たっては、「草津川跡地利用基本構想」に定める方針に基づくとともに、第 5 次草津市総合計画における本市の将来像である「出会いが織りなすふるさと“元気”と“うるおい”のあるまち草津」の実現に向け、改めて草津川跡地のまちづくり資源としての優れたポテンシャル*に着目し、計画の充実・具体化を図ることとします。

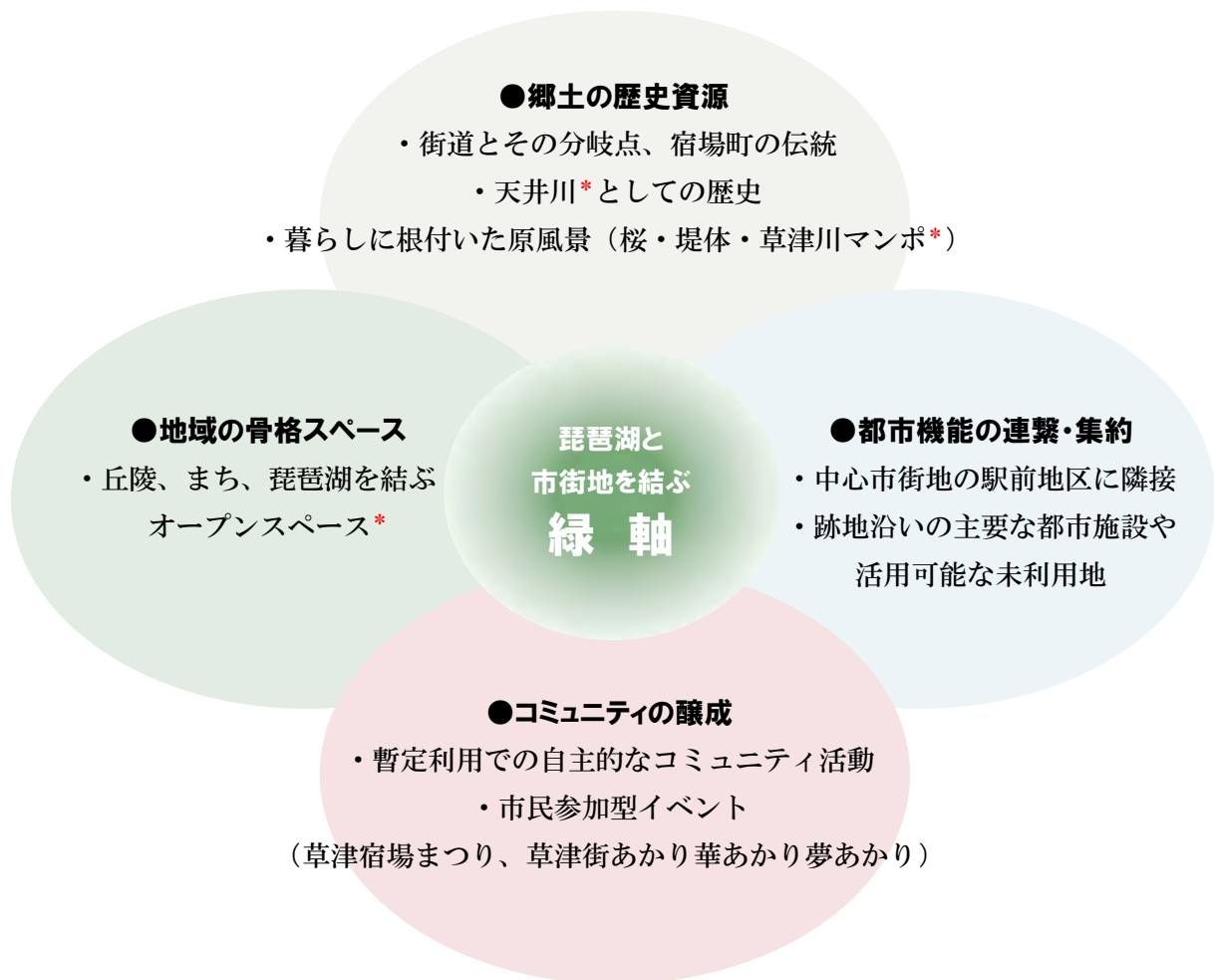
「地域の骨格スペース」である草津川跡地は、「郷土の歴史資源」や「都市機能の連繋・集約」の軸として優れた立地条件を有しています。また、そこでは市民主体による屋外活動やイベントなど「コミュニティの醸成」が図られ、市民主体によるまちづくりの実践の場としても重要な役割を果たしつつあります。

このような草津川跡地の特性に着目すると、草津市が目指す将来像の実現のためには、草津川跡地を最大限生かして、都市の環境・景観を高める質の高い緑地空間として整備するとともに、中心市街地や周辺都市施設と一体となって、人々の交流や多様な文化・コミュニティ活動の場となる、新しいにぎわいのステージとして、人びとの心を強くひきつける力を発揮できるようにする、という視点を定めるのが重要と考えられます。

そのような視点に立って、この計画の目的として、草津川跡地を単に公園・緑地空間としてとらえるだけでなく、草津市の都市価値を高め、未来に新しいチャンスを広げる空間としてとらえ、『どこにもない 魅力まちづくりの舞台開き』を目指すこととします。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

【まちづくり資源としての草津川跡地の優れた特性】



単なる公園・緑地として整備するだけでなく、草津市ならではのまちづくり空間としての魅力づくりを追求します。

【計画の目的】

草津市の都市価値を高め、
未来に新しいチャンスを広げる
『どこにもない 魅力まちづくりの舞台開き』
を目指します。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

第2章 計画の基本的な考え方

2.1 基本理念

「どこにもない 魅力まちづくりの舞台開き」は、市民主体による創意あふれるまちづくりにより、人々の交流や多様な文化・コミュニティの場となる新しいにぎわいのまちづくり空間として、草津市の都市価値を高めることを目的としています。

このことを進めていくためには、草津宿を始めとする草津独自の歴史・文化を生かし未来へと発展させることが求められます。また、望ましい新たな未来は、天井川が自然と人の手の両方の相乗作用によって作られたように、人と自然の力が相まみえることにより、歴史・文化そして都市・環境を創りだすことによりもたらされます。

以上の観点から、本計画では次の基本理念を設定して、どこにもない 魅力まちづくりの舞台開きの実現を目指します。

■計画の基本理念

「歴史をつくる、人と自然の合作」

2.2 計画目標

歴史・文化などの固有の資源、都市構造上の立地特性などを踏まえ、環境への負荷低減と都市活力の拡大の両立を実現し、今後長きにわたり発展し続ける未来志向型の空間形成に向け、基本理念の基に以下の計画目標を設定します。

■歴史・文化・資源を生かし未来に継承

草津宿本陣や旅人を導く道標、堤体沿いの桜並木、湖岸沿いに広がる広大な農地など固有の歴史・文化的な資源や、天井川*ゆえの地形による琵琶湖の対岸の比良・比叡の山並みや背後の湖南アルプスや三上山の眺望景観などを生かし、わがまちの記憶を未来へと継承します。

■新しいまちづくりによる都市の特徴づくり

自然環境との共生、健康・安全を求めたオーガニック指向、支え合う地域コミュニティ*の再構築、市民が自ら参画する協働のまちづくりなど、先進的なまちづくり・ライフスタイル*を実践する舞台とすることで、草津らしい独自の都市景観を創出し、次世代型都市としての個性・魅力を磨きます。

■市街地の活性化を始めとした都市再生

草津市の中心的な市街地のほぼ中央を貫いて琵琶湖につながる立地、周辺に点在する駅や商業施設、公共施設との近接性などを生かし、草津川跡地で展開される集客性の高い魅力的な環境や施設・機能との連携により、既存の市街地を核とする都市機能の集約化により、都市構造を強化し、持続的な都市としての発展、再生を図ります。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

2.3 目標達成に向けての基本的戦略

計画目標を実現する上で、以下の7つの戦略に基づき、ハード面・ソフト面にわたる具体的な計画を展開することとします。

■歴史・文化・環境の保全・活用

街道沿いの宿場町として成り立ち、交通結節点の強みを生かした発展の中で、多彩な歴史・文化資源が培われてきました。また、天井川*としての旧草津川は、市民の心の中にとどまっています。それら草津の歴史、文化、環境を保全・活用し、空間・施設デザインなどに反映することで、草津ならではの都市環境の形成につなげます。

■都市価値の向上

高い水準のデザイン性を備えた空間をはじめ、環境共生型の空間・施設、自動車依存の少ない交通マネジメント*、立地特性を生かした防災空間などの先進的・独創的な機能・空間を積極的に展開することで、全国に発信できる先進的な空間を創造し、草津市の都市価値を高めます。

■新しい成長戦略の展開

グリーンツーリズムやエコツーリズムなどの新しいレクリエーション・観光事業をはじめ、周辺地域と連携した回遊性の向上や魅力的な集客施設の導入、高付加価値型の園芸・農業など、新しい経済活動が生まれる仕組みづくりを行うことで、市民が常に集い、多くの来街者が行き交う場として、草津市の新たな成長戦略を展開します。

■環境共生への対応

多様な植生を生み出す植栽計画、ビオトープ*の配置など、生物多様性*の考えを取り入れた近自然型の環境を創りだします。また、自然エネルギーの利用や維持管理に伴う雑草・落ち葉・剪定枝の再利用などの資源の有効利用を推進するなど環境共生への対応により、エコまちづくりのモデルとします。

■都市機能の連携・強化

草津川跡地に沿って立地する駅や商業施設、市役所・公園・学校などの公共施設と連携し補完する機能展開・空間デザインを図ることにより、交通機能・都市福利機能はもとより、コミュニティ・防災・環境面などの都市機能の充実・向上を目指します。

■農空間の積極的な活用

湖岸沿いに広がる農空間を生かし、連携する菜園ガーデンや牧場など、都市と農村の交流空間・農体験の場として積極的な活用を図ります。また、周辺農家と連携した直販所や自然食レストランなど、健康・安全を求めたオーガニック*志向に応える機能を導入します。

■地域マネジメントの確立

市民や事業者の参画した自立的な組織が、継続的に維持管理・運営など行う仕組みを確立し、低コストによる質の高い空間の維持・管理を行うとともに、民間の発想を取り入れた自由度の高い企画や施設運営を図ります。また、自己実現の場となる多様なコミュニティ活動の展開などを図ります。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

2.4 空間目標と空間像

「魅力まちづくりの舞台開き」を実現するためには、目に見える空間をどれほど質の高い、永く未来の感性にも応えられるものとするかが、きわめて重要です。

そこで基本理念である「歴史をつくる、人と自然の合作」を具体的な空間として表現するため、求められる役割や場のイメージを踏まえた、空間目標を明確に掲げることとします。

新たに創りだされる空間は、過去の歴史から現在、未来までもが感じられる空間であるとともに、人と自然のふれあい、関わり合いを通して人間として健やかな心身が育くまれ、生命力が得られる場であることを目標とします。

■空間目標

「時の流れを見つめる場を提供し、心身が癒され^い 生きる力が得られる場」

空間目標とした「時の流れを見つめる場を提供し、心身が癒され生きる力が得られる場」は、単に自然としての緑を保全・再生するにとどまらず、時間をかけて人の活動と自然とが共生し、双方が関わり合い、共に成長していくプロセスの中で実現されます。また、使う側・作る側が一体となって植栽環境を楽しみ、創造するなど空間で繰り広げられる活動により、生き生きとした風景が創出されます。

この様に、多くの人に関わり、自然と人が時と共に生き、成長する空間づくりを“ガーデン”としてとらえ、その中で「人と自然」「人と人」がつながり、共に生きる空間像を「人と自然 人と人がつながるガーデンミュージアム*」を目指して」と設定します。

ガーデンミュージアムは、自然の中に手本を求め、ありのままの自然の花や木の姿を活かした美しく感動を呼ぶナチュラルガーデン*の考え方に基づいて、「ガーデンのすべてが楽しめる」ように、多彩なガーデンの姿をつくりだします。

■空間像

**人と自然 人と人がつながる
ガーデンミュージアムをめざして**

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

2.5 ガーデンミュージアムの整備の方向性

「ガーデンミュージアム*」が「これまでにない先進的で魅力的なガーデン*」となり、全国へ発信することで、草津市の都市価値を将来にわたり支えることを目標に、下記の整備の方向性を示します。

■高い水準のガーデンデザインを表現

画一的な公園や緑地でもなく、形式的な「作庭」ではない、自然と人の共生を基本とする新しいガーデンデザインを全域で実施することで、質の高い空間づくりを図ります。全国から人を集めている「北海道ガーデン*」や、世界が注目するニューヨークの高架鉄道跡をガーデン空間に変身させた「ハイライン*」などにひけをとらない水準を目指し、市街地と琵琶湖をつなぐ、他所にはない条件を生かして、草津川跡地ならではのオンリーワンを創造します。

■ガーデンスタイルの全てを備える

ガーデンには様々な種類がありますが、草津川跡地の特性を生かし、変化に富んだガーデンを知り、楽しめるようにします。

斜面を利用したロックガーデン*、水の流れを取り入れたウォーターガーデン*、山野草や雑木林のあるフォレストガーデン*など可能性を広げます。

■ガーデニング*を愛する人たちの集いの場

ゆとりや自然回帰を志向する価値観を背景に、世界でも、日本でもガーデニングに親しむ人々が増えつつありますが、しっかりとガーデニングを身につける機会や情報交換の場、良い花苗やガーデニンググッズが得られるところが少ない現状があります。そんなニーズに全面的に応えられるソフト・ハードをそろえます。

市民が参加して、つくり、育てるプロセスが常に見られることも、ガーデニング愛好者のメッカになる要素です。

■みどりと生活、産業、文化の新しいつながり方の提案

ガーデニング人口が増え、より高いレベルの苗木やグッズへのニーズが高まることに対応して、計画地やまちなかに関連商品を扱う事業所立地を促します。さらにはそこに素材提供をする園芸農家や生産機能が求められます。あるいは働き手や商品・技術開発のための教育・研究機能を引き出していくといった、新しい生活提案とともに産業・文化の連環につながる仕組みをつくり出します。

■まちと一体となるみどり、まちを行き交う緑の創出

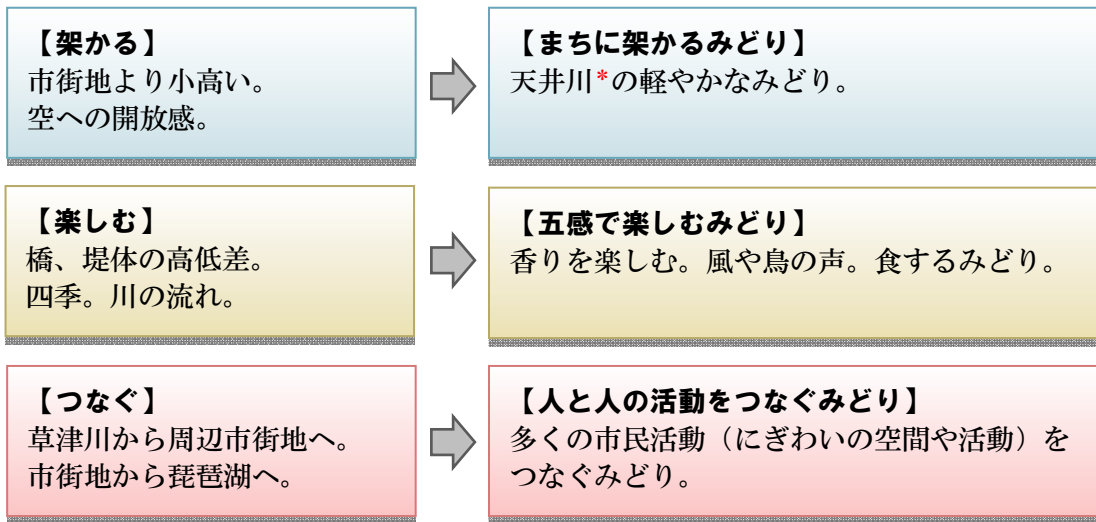
草津川跡地が天井川*であり、街道の追分、東海道と重なり、商店街などにぎわいの通りと交差するという特性を活かして、歴史あるまちなみや、街道のたたずまいと相乗効果が出るような、まちとのつながりを、計画の重要な要素として印象的な「クロスポイント*」「ビューポイント*」をできるだけ多くガーデニング手法により創り出します。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

■デザインキーワードと整備の空間イメージ

ガーデンミュージアム*を具体化するために、デザインキーワードから空間イメージをさらに進めます。

市街地より高い草津川跡地を「まちに架かるみどり」ととらえ、軽やかなみどりで空間を演出します。また、生き生きとした風景は市民活動のつながりと考え、その役割をつなぐことを草津川跡地の役割ととらえ、さまざまな市民活動が生まれる空間づくりを目指すとともに、楽しめる場づくりを進めていきます。



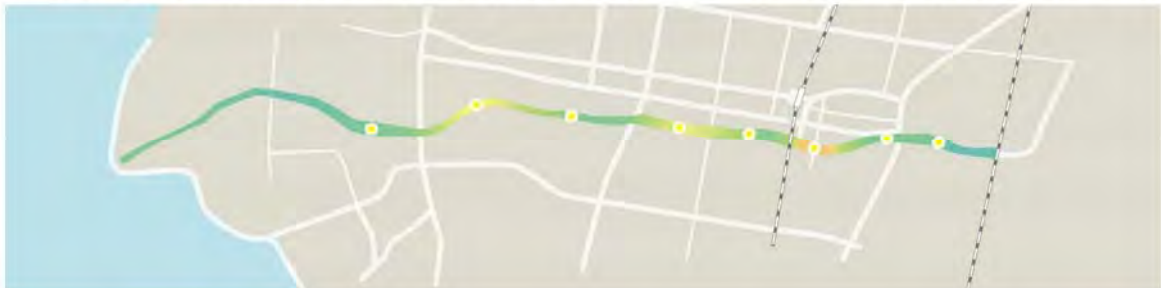
「架かる」…天井川の軽やかなみどり

市街地より高い草津川跡地を、イメージ的に「まちに架かるみどり」と捉えます



「楽しむ」…香りを楽しむ。風や鳥の声。食するみどり

にぎわいは市民活動のつながりと考え、その役割をつなぐことを草津川の役割と捉えます



「つなぐ」…多くの市民活動（にぎわいの空間や活動）をつなぐみどり

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

第3章 トータルデザイン 全区間の基本的な枠組み

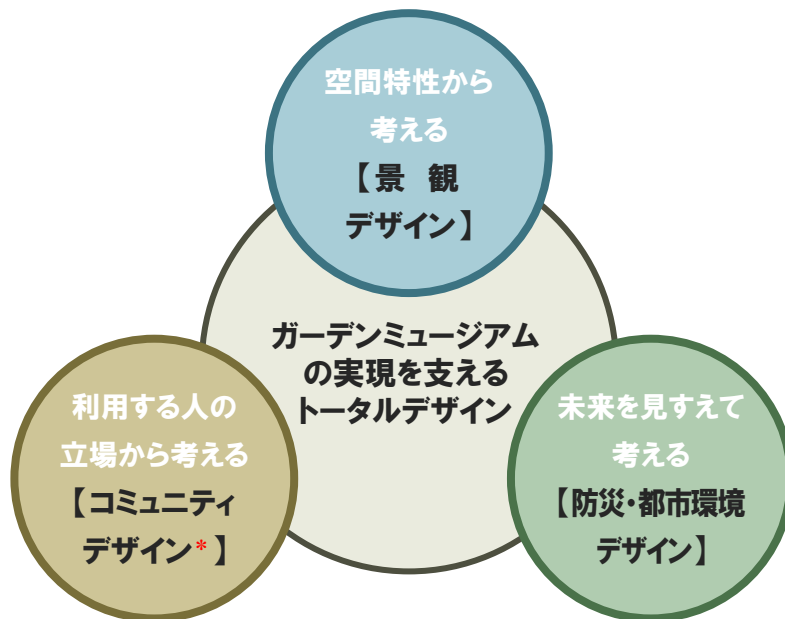
3.1 トータルデザインとは

広大で長い時間をかけて創り上げていくガーデンミュージアムは、すべての施設、仕組み、活動において、高い質を備えた空間づくり、仕組みづくりのために統一感、整合性のとれたデザインを目指す必要があります。この様な取り組みを進めることで「これまでにない先進的で魅力的なガーデン空間・管理」が、行政のみではなく市民や専門家の手で実現されるとともに、ガーデンミュージアムに対する市民の誇りと愛着も高まります。

この様な総合的なデザイン手法を「トータルデザイン」と位置づけ、「景観デザイン」、「コミュニティデザイン」、「防災・都市環境デザイン」という3つの要素から基本的な枠組みを掲げることとします。

3.2 トータルデザインの構成

トータルデザイン*の3要素である「景観デザイン」、「コミュニティデザイン」、「防災・都市環境デザイン」が支えあって持続可能な空間として実現されます。



●●●空間特性から考える 景観デザイン●●●

草津川跡地は琵琶湖から市街地をつなぐ貴重な緑の財産と言えます。

草津駅周辺や商店街、草津宿本陣などの歴史的資産に囲まれた市街地にある草津川跡地においては、普段の喧騒から離れ、リフレッシュするための憩いのオアシスと呼ぶにふさわしい空間特性を有しています。また、琵琶湖に近づくにつれ、身近に農園活動や生き物と触れ合うような自然観察・体験など、余暇活動を楽しめる空間特性を有しています。

さらには、江戸時代中頃からと言われる長い年月をかけて培われた天井川*の持つ独特の地形、歴史にも、過去と現在、そして未来をつなぐ時空の空間特性を有しています。

草津川跡地は、草津市の都市構造、都市の個性や魅力を構築しうる存在であり、それらを今後末永く引き継いでいけるよう表現する必要があります。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

●●●●利用する人の立場から考える コミュニティデザイン●●●●

草津川跡地ではその歴史の変遷と共に、市民の生活や活動が営まれてきました。また、草津川跡地活用を視野に入れつつ、全市的な「コミュニティガーデン」への取り組みが始まっています。

ハード面の完成度を高めるためにも、末永くより良い姿に成長させていくためにも、事業化に向けての人と人のつながりや支え合いの関係を深めつつ、参加と協働のまちづくりとしての展開が望まれます。

草津川跡地は、多様な主体の参加のもとに市民と行政との連携を図り、周辺地域の価値向上に寄与するものです。この実現には末永く引き継ぐための仕組みづくりが重要です。

●●●●未来を見すえて考える 防災・都市環境デザイン●●●●

先の東日本大震災では、死者、行方不明者が2万人近くに達するなど戦後最悪の自然災害となりました。自然の摂理への柔軟な対応と共に、オープンスペース*の確保やコミュニティ*活動を促す環境整備など「減災*」の考え方を取り入れたまちづくりへの転換が求められます。

また、未来の子供たちにかげがえのない地球環境を残すためにも、低炭素社会*実現に向け、環境に配慮したまちづくりへ向かう必要があります。

草津川跡地は、災害に強い安全・安心なまちづくりと低炭素社会（エコタウン*）に寄与するふさわしい空間であり、それらを今後末永く引き継いでいけるよう表現する必要があります。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

3.3 景観デザイン

(1) 景観デザインのコンセプト

景観デザインでは、「まちに架かるみどり」を実際の空間で展開する上でのコンセプトを設定します。

天井川と街道の新しい空間化を「歴史性の継承」として目指すとともに、草木との一体感、生物多様性に配慮した「自然との共生」空間づくりを行います。さらに、親しみやすさや人間を中心に考えデザインされた空間づくりを「人間性の尊重」としてデザインコンセプトに設定します。

歴史性の継承

- 天井川、堤体、街道といった固有の空間特性を意識し、新しい空間化につなげます。
- 草津市のアイデンティティである天井川と街道の歴史を活かした景観を演出します。
- 市民の日常生活ルートでもある堤体や草津川マンポ*の歴史性を活かした景観づくりを行います。



自然との共生

- 未来に向け「自然と共に生きる」ライフスタイル*を目指し、自然環境、草木との一体感などを基本とします。
- 市街地から琵琶湖までの緑の連続性と、各区間の個性を活かしたガーデンにより四季折々のグラデーション*を形成します。
- 草木とともに歩行者道への庭園灯やフットライト*などの光の演出により、明るすぎず、安全で柔らかな連続性のある夜間景観を形成します。



人間性の尊重

- ヒューマンスケール*、親しみやすさ、ユニバーサルデザイン*といった要素を重視します。
- 身近に水や緑にふれられる空間づくりを通し、心安らぐ憩いの空間を演出します。



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(2) 景観デザインを具現化するための工夫

さまざまな形で、みどりの立体感、連続性をつくる工夫を行い、「まちに架かるみどり」を生み出します。デザインコンセプトから導き出されるみどりをつくる工夫を示します。

■歴史性の継承……地形を活かす（堤体の高さを活かした外構、植栽など）



↑法面を活かした立体感のあるみどり



↑高低差を活かした眺望点の整備

■自然との共生……小さな変化（小さな水、花）歩いて楽しめる変化。



↑自然と一体のテラス
←自然と調和した橋



↑階段脇の小さなみどり

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

■人間性の尊重……人と人の交流、楽しい仕掛け。鳥や蝶、魚など生き物を育むみどり。



↑みんなで草花や低木を植える



←身近にできる
自然観察



ビオトープ池

■ナチュラルガーデン手法の基本要素

●デザインパターン

人工的な幾何学的線形・造形はできるだけ避け、自然界をモチーフ（手本）とします。

●デザインの品質

「高感度」「奥行き・深み」といったキーワードを意識し、クオリティ（質）の高い空間構成を目指します。

●素材

原則として木、石、土など自然素材（陶製、鉄製なども含む）を基本とします。



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(3) ガーデンミュージアムの構成要素

周辺市街地の連携・連続性にも配慮しながら、「ガーデンミュージアム」をまちなかと琵琶湖をつなぐ、全国に類を見ない草津市ならではのオンリーワンの魅力空間として創出します。様々なガーデン*を各区間に展開するとともに、ゆるやかに変化させながら新たなガーデンにつながるようにガーデンミュージアム*を形成します。



エコ・ファームガーデン

周辺の農空間と係りし、ファームガーデンを形づくりします。新鮮な食材提供など、マルシェガーデンとも係りします。



マルシェガーデン

地場産のマルシェ、カフェ、レストランなど、集客機能をそなえたにぎわい空間の核とします。

ナチュラルガーデン

ありのままの自然の花や木の姿を活かし、植物の生きる力が伝わる、安らぎや癒しを基調としたガーデニング手法により組み立てます。

草津川のみどりの基軸である。様々なガーデンの種類、タイプを展開し、変化と豊かさを与えます。

バイオガーデン

健康づくり、子育てや遊びなど市民の憩いの場となる空間をつくります

エコ・ウェルネスガーデン



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

3.4 コミュニティデザイン

(1) コミュニティデザイン*とは

みんなが利用する空間を利用する側の市民がつくる側にも立って、参加しながら計画づくり、空間づくりを進めます。そして、整備された後の利活用や管理などより良い姿を保ち育む活動を通じて、地域への愛着を深め、人と人がつながり強いコミュニティを築いていくことが重要です。

そのためには、市民参加のためのコミュニティ形成の場や土台づくりが大切で、まずは空間を様々なかたちで共に考え、行動する熱心な担い手を発掘していきます。そこから人のネットワークをたどってコミュニティづくりをしていきます。

この様な市民をはじめとした様々な主体が、コミュニティを形成しつつコミュニティのための空間のデザインを行うこと、また、その過程や後の管理・運営に参画するプロセス・プログラムをデザインすることをコミュニティデザインとします。

(2) コミュニティデザイン*のコンセプト

コミュニティデザインを進めるには、計画段階からの「公共空間づくりへの市民参加」が必要であり、また、そのための様々な市民参加手法の導入を行います。また、市民参加のプログラムの構築や活動の場づくりなど「市民が主役となる行動計画」を進めることで市民活動の輪をさらに広げます。さらに、これらの市民活動の取り組みを支える仕組みや役割分担などを「市民と行政の協働による仕組み」として取り組みます。

公共空間づくりへの市民参加

- 計画の企画段階から市民が加わって、市民が共に学び、考え、つながりを強める場づくりを行います。
- 市民シンポジウム*やワークショップ*などを通じて、ガーデンミュージアムでの活動の担い手の参加やネットワークづくりを行います。



市民が主役となる行動計画

- 宿場まつりなどに加えて、音楽、絵画、写真など、市民の創作、交流の場を展開します。
- 自然環境学習、防災訓練、美化活動など、市民の自発的な活動を育む場を展開します。



市民と行政の協働による仕組み

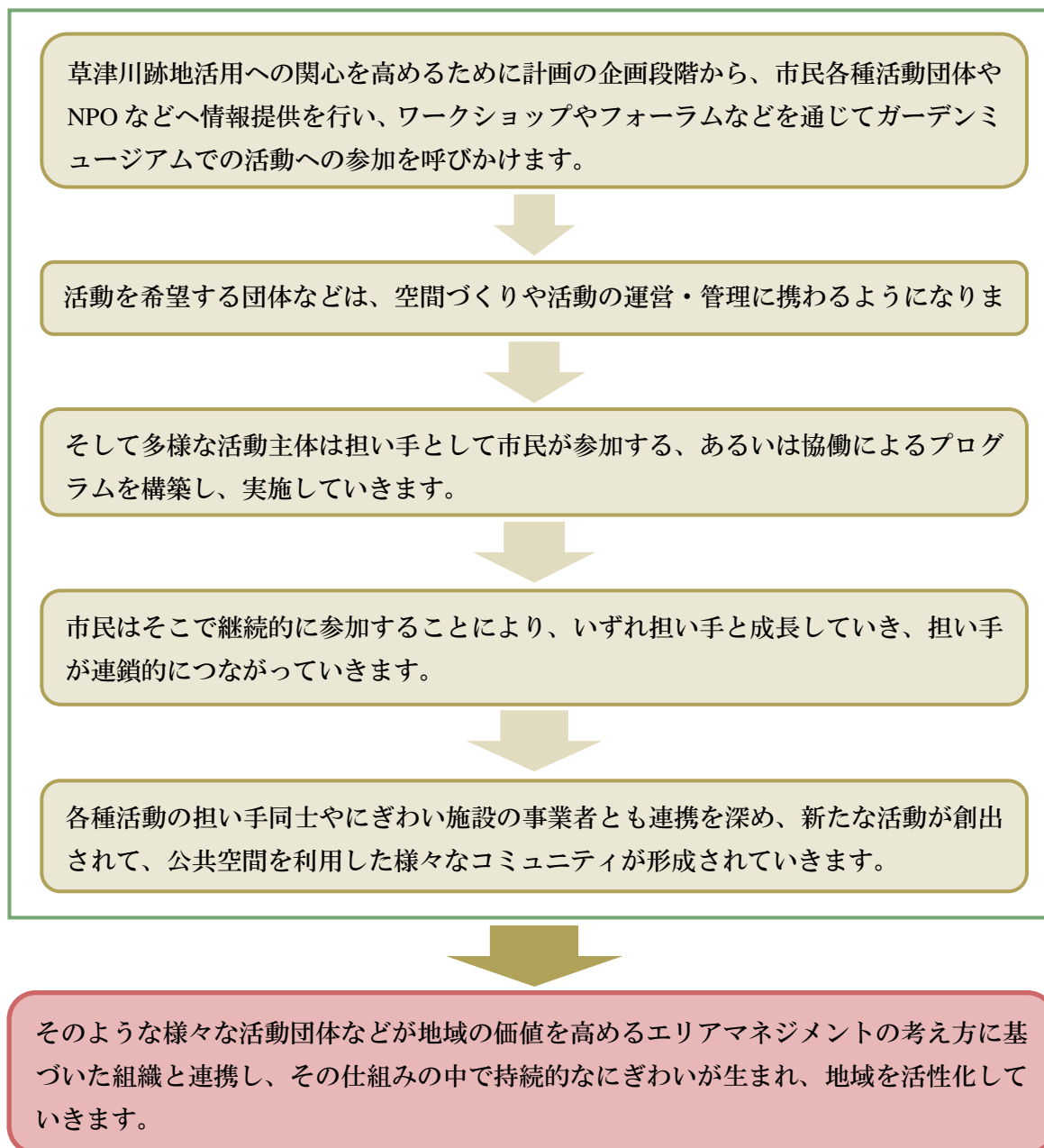
- 市民、事業者、行政など、多様な主体が連携するエリアマネジメント*の仕組みの導入を検討します。
- 行政は、市民と協働で行動することや、市民による持続的な活動を支えるための環境づくりを進めます。



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(3) コミュニティデザイン*の取り組み(草津川跡地でのコミュニティデザインの考え方)

コミュニティデザインは、市民がガーデンミュージアムへの理解を深め、関心を高められるような取り組みから始まります。さらに、ガーデンづくりへの参加の呼びかけ、ネットワークづくりを経て、市民が主体となる、あるいは協働による様々なプロジェクトが活躍することで、新たな持続可能な力が生み出され、さらなるコミュニティの醸成や地域の活性化につながることを期待されます。



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(4)草津川跡地のエリアマネジメント*とは

草津川跡地のエリアマネジメントとは、ガーデンミュージアムの実現に向けて、草津川跡地が長い年月をかけて発展し続けられるようにするため、市民、事業者、行政など多様な主体が一つの連携組織の中でつながり、役割分担、共同行動できる新しい仕組みをつくるものです。持続可能なにぎわい空間創出を展開するとともに、広大な草津川跡地空間の管理・活用も一体的に行う必要があります、その一つとしてエリアマネジメントの仕組みづくりが求められます。

その仕組みの中で、市民が幅広く参加して活動を行う例には次のようなものが考えられます。



■活動プログラムの例 ～コミュニティガーデン*の実践～

●コミュニティガーデンとは

どんな植栽であっても草花の花がら摘みや整枝、剪定、雑草取りなど、手入れをするほど美しく、より良い姿に成長していきます。それをできるだけローコスト*で、かつ市民の楽しみ、自己実現、コミュニティ*づくりとも兼ねて行う方法として、コミュニティガーデンを実践します。

市民が担う部分のポイント

- ①ガーデニング*活動の「仕組み」(ガーデニングサークル)
- ②専門家によるサポート体制
- ③市民が楽しみながら、ガーデニングのスキルアップ*できる「講座」「研修」「イベント」との組み合わせ
- ④民間のショップ・テナントスタッフの参加・協力

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(5) 市民参加による活動に向けて

ガーデンミュージアムでの運営においては、利用者が運営に参画するための仕組みづくりが重要となります。特に、利用者を「ホスト（もてなす側）」と「ゲスト（利用する側）」の両面の可能性あるものと考え、これまでの屋外公共空間ではあまり見られなかった「ホスト」を生み出す新たな市民参加の仕組みを取り入れます。

①コミュニティによるプログラムの提供

草津市域を中心として幅広いエリアのコミュニティ*が、草津川跡地の各ゾーンで多様なプログラムを提供することで、新たな「潜在的な利用者」を呼び込むことにつながります。

【活動プログラムのイメージ例】

- ・自然学習活動
- ・アートイベント
- ・フリーマーケット*
- ・自主防災訓練 など

②周辺施設・機関・団体との連携

周辺に存在する草津川跡地のコンセプトと関連の深い様々な機関と連携することで、草津川跡地が「地域のプラットフォーム」となり、より地域に根ざした屋外公共空間へと成長していきます。

【連携する施設・機関・団体のイメージ例】

- ・地域に根ざした企業（CSR*活動など）
- ・地域団体、商工団体、障害者団体など
- ・周辺に存在する大学の研究室、教育機関
- ・周辺農家、JAなど

③「責任ある担い手」としてのコミュニティの育成

各コミュニティは草津川跡地での「責任ある担い手」としての活動ができるように、供用開始前からの関係づくりやコンセプトの共有を行ないます。

【コンセプト共有の手法例】

- ・活動している団体（NPO など）へのヒアリング
- ・活動団体を対象としたワークショップ* など

④「コーディネーター」の育成

各コミュニティと草津川跡地の管理者と調整役を担うコーディネーター*を育成し、配置することが重要となります。

草津川跡地の整備が進められている間に、人材を発掘し、各コミュニティとの関係性を築き、ネットワーク*を構築しておくことが求められます。

【コーディネーターに求められる役割】

- ・課題発見能力や問題解決能力、調整能力
- ・市民活動に関わる既存の組織とのネットワーク など

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

3.5 防災・都市環境デザイン

(1) 防災・都市環境デザインとは

阪神淡路大震災や東日本大震災における教訓から「何としても人命を守る」という考えを基本にすえてハード・ソフト施策を総動員して防災性の高い空間づくりを目指します。

草津川跡地は、広大で連続した空間であり、地形そのものが高い防災性を備えたハードといえます。また、加えて周辺施設とのネットワークや太陽光発電などに代表される自然力を活用することにより、災害時の自立した防災拠点になりうることも可能です。

さらに、日頃から多くの人がよく利用する仕組みづくりとともに、日常時の市民活動の中に防災の取り組みというソフトを合わせることで、いざという災害時に日々の習慣的な防災意識を思い起こし、自助・共助を可能とする空間づくり、活動づくりを防災・都市環境デザインで実現します。

(2) 防災・都市環境デザインのコンセプト

草津川跡地が備え持つ高い防災力を非日常時に発揮できるよう、「日常の行動が活かせる防災コミュニティづくり」を進めます。また、「周辺地域防災施設とのネットワーク化」により草津川跡地を介した広域の防災ネットワークを構築します。さらに、「自然力を生かす都市活力・都市環境づくり」を進めることで、地域コミュニティの醸成に寄与するとともに、災害時のライフラインの断絶時などに自立できる環境づくりを目指します。

日常の行動が活かせる防災コミュニティづくり

- 日常のコミュニティ活動の醸成が災害時の共助の絆を深めます。学校、自治会などで防災教育、防災訓練などで地域防災力を高めるように努めます。
- 自助、共助の作動時に、公助としての避難空間の



周辺地域防災施設とのネットワーク化

- 地形・スペースそのものが視認性、認知度など強い防災力を持っています。地形をさらに活かすため、災害時に備えた施設や仕組みを備えます。
- 周辺地域の防災施設との連携を考慮し、適切なアクセス路の整備、災害時の活動が可能なオープンスペース、施設配置を行うことで、広域での防災ネットワークの構築に寄与します。

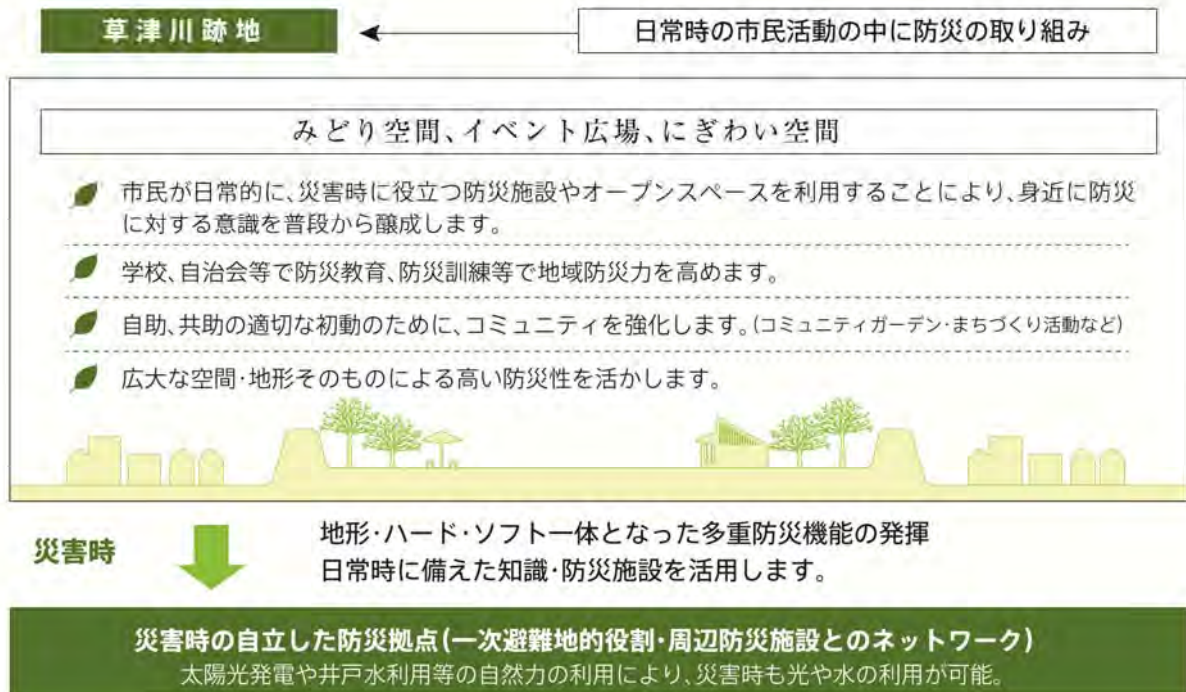


自然力を生かす都市活力・都市環境づくり

- 草津川跡地では、非常時に自然力という資源を有効に活用し、市民の生活を支えます。
- 循環型社会の形成や都市活力の向上を目的に、自然の力を有効に活用する仕組み作りを整備段階から構築するとともに、多様な主体による環境関連活動の支援・促進を行います。



防災・都市環境デザインの概念



阪神淡路大震災や東日本大震災における教訓から「なんとしても人命を守る」という考え方を基本にすえて、ハード・ソフト施策を総動員して防災性の高い空間づくりを目指します。

草津川跡地の広大で、連続した空間は、地形そのものが高い防災性を備えたハードといえます。

まず、日頃から多くの人々が良く利用すると共に、日常時の市民活動の中に防災の取り組みというソフトが合わさることで、いざという災害時に、目々の習慣的な防災意識を思い起こし、自助共助を可能とする空間づくりを目指します。

※一次避難地的役割とは、災害時において自宅などが危険な場合、主として一時的に避難する場所としての機能を有することを指します。

(3) 防災機能の時間的な考え方

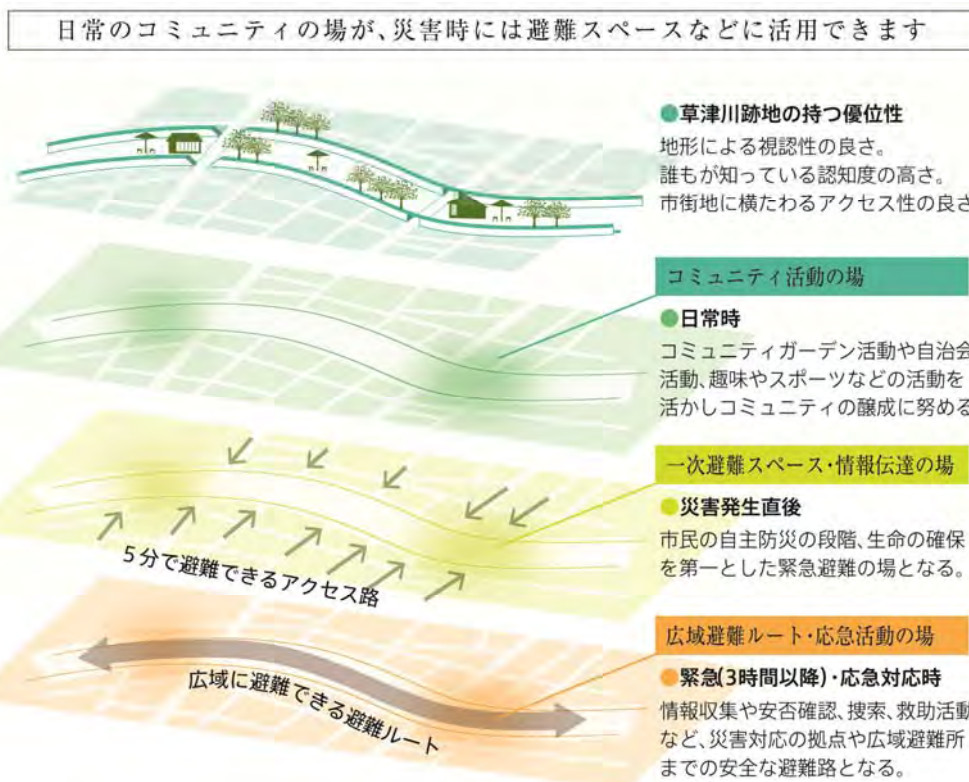
草津川跡地の有する貴重なオープンスペースに対して、防災機能の時間的な考え方を導入します。草津川跡地では災害時に一次避難地的機能を目指すことから、災害時の時間軸を考慮すると、災害発生直後から緊急（3時間以降）、そして応急、復旧・復興と進行するなかで概ね3日（72時間）程度の防災機能を有する必要があります。

<時系列に沿った防災活動の展開イメージ>

機能	段階	予防 (平常時の利用)					
		発災前	発災	直後 概ね3時間	緊急 概ね3日	応急	復旧・復興
①避難（一時的避難および広域避難）							
②災害の防止と軽減,および避難スペースの安全性の向上							
③情報の収集と伝達							
④消防・救援、医療・救護活動の支援							
⑤避難および一時的避難生活の支援							
⑥防疫・清掃活動の支援							
⑦復旧活動の支援							
⑧各種輸送のための支援（③～⑦関連）							

これを階層的に表現すると以下の通りとなります。日常時のコミュニティ活動の場が、災害発生直後には一次避難スペースや情報伝達の場となり、さらに緊急・応急時には、広域避難ルートや応急活動の場としての活用が図られることとなります。

草津川跡地における防災機能の時間軸の考え方



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

